

武蔵野幕屋 日曜聖書講筵 詩篇連続講義 第1回

勝利の幕屋

――詩篇第91篇――

1958年1月12日

小池辰雄

神様との対話が祈り わがよりたのむ神 神の信実 神の栄光を現わす使命 天則霊法・必然・自由 真言・真法 幕屋の構造ABCX 愛の貫流・環流・交流 みなキリストの体 個即全 キリストの生命の現われ 神の守り 身にしみて知る 聖霊の幕屋・キリストの幕屋・神の幕屋 キリストの勝利の幕屋 祈り

【詩篇91】

1 至上者いとたかきもののもとなる隠れたるところにすまうその人は全能者の蔭にやどらん
2 われエホバのことを宣のべて エホバはわが避所さけどころわが城わがよりたのむ神なり
といわん
3 そは神なんじを狩人かりうどのわなと毒をながす疫癘えやみよりたすけいだしたもうべければなり

4 かれその翮はねをもてなんじを庇おおいたまわんなんじその翼の下にかくれんその真実まことは盾たてなり干なり

5 夜はおどろくべきことあり昼はとびきたる矢あり

6 幽暗くらきにはあゆむ疫癘えやみあり日午ひるにはそこなう勵はげしき疾やまひありされどなんじ畏おそるることあらじ

7 千人はなんじの左にたおれ万人はなんじの右にたおるされどその災害わざわいはなんじに近づくことなからん

8 なんじの眼はただこの事をみるのみなんじ悪者あしきもののむくいを見ん

9 なんじ曩むかしにいえりエホバはわが避所さけどころなりとなんじ至上者いとたかきものをその住居すまいとなしたれば

10 災害わざわいなんじにいたらず苦難なやみなんじの幕屋に近づかじ

11 そは至上者いとたかきものなんじのためにその使者輩つかいたちにおおせて 汝があゆむもろもろの道になんじを守らせ給えばなり

12 彼ら手にてなんじの足の石にふれざらんために汝をささえん

13 なんじは獅ししと蝮まむしとをふみ壯獅わかきししと蛇とを足の下にふみにじらん

14 彼その愛をわれにそそげるがゆえに我これを助けんかれわが名をしるがゆ



えに我これを高^{たかきところ}処におかん

15 かれ我をよばば我こたえん 我その苦難のときに偕におりて之をたすけ之を

あがめん

16 われ長^{ながきいのち}寿をもてかれを足^{たら}わしめ且わが救いをしめさん

●神様との対話が祈り

今日から詩篇を暫く学びますが、私は大分前に病気を致しました時、病床で詩篇に親しましました。その時はじめて詩篇というものが非常に親しい本になったということを経験しております。詩篇は「祈りの書」である。また「讚美の書」である。

「テヒリーム」

というヘブライ語は、「ハレルヤ」の「ハールル」という言葉からきていて、詩篇というのは「讚美歌集」ということです。或るところではこれを「祈りの書」といつています。非常に言葉も似ている。預言者は神の言を聴きまして、これを伝えていきます。詩篇は人の側から神への言で、人間の言葉の中で最も純粋な言は、この詩篇の言です。

私たちは日記を書きます。大分、私も日記を怠ってしまつて、この元旦から少し付け始めています。いつまで続くかわかりません。また、手紙を書きます。私もずいぶん手紙を書く方で、他人からきた手紙も、もう大きなリンゴ箱に、いくつになりますかね、学生時代からのもの、要件でない手紙はみんなとってあります。手紙と葉書です。あれをひっくりかえしたらば、それから直に生涯の伝記が書けるかも知れない。まああんなにたくさん手紙を書くもんじゃないけれども、どうもこれは或る私のくせかもしれない。あんまりいいくせじゃない。

私たちの会話は、親友とも語りますが、一番深い会話は、神様とのダイヤログ、会話です。神様との対話が「祈り」ですね。祈りというとは普通は、何かお願いすることが祈りかと思つているけれども、勿論それも祈りの重要な面ですけれども、お願いばかりが祈りではない。祈りは一番深い意味において会話です。

プラトンの哲学が何故素晴らしいか。これはひとつの対話になつていて、劇的に展開していく。魂の構造は、これは劇的なものです。文学でも最高の形式はドラマですね。私は、

「聖書はドラマである」

とよく申します。聖書は劇である。オラトリウム、聖なる劇である。これを教えと思つては、かえつて非常に薄くなつてしまふ。聖書は聖なるドラマである。ドラマの中に入つて、プラトンの哲学があのだらマイックな対話でもつて展開していくところに、おそらく哲学の歴史でもやつぱりこれは最高峯じゃないかと思う。

この間、或る学生が遊びに来たから、もうすっかりやることが済んでしまつて、これから卒業で、「何をしたらいいか？」と問われましたから、



「聖書とプラトンをとにかくお読みなさい」

とすすめた。私はプラトン研究家でもなんでもないですが、所謂論理的に研究し展開された真理よりも、非常にドラマティックに展開された真理の方が、私はやはり一番真理を表現するものであると思う。ドストエフスキーの小説が何故素晴らしいか。あそこにおける対話が素晴らしい。

この詩篇が即ち神様との対話なんです、神様の方の声は詩篇にも、今日の91篇にもちよつと出ています。けれども、神様からの声よりも、人間の側の声が非常に多いわけです。しかし、やっぱり神の隠れたる声がある。詩篇は人間の側からのうったえている祈りであるから、祈りが非常にドラマティックになっている。

祈りが何故そんなにドラマティックであるかというと、やっぱり神様との対話がそこにあるからです。祈っているうちにだんだんそれがドラマティックに展開してゆく。はじめは、嘆いて苦しがっていても、最後には驚くべき讃美に変わったりしている。これはひとりでもってそうなるのじゃない。神様との対話においてそれが展開する、させられていく。だから、聞こえざる神の声が詩篇の底に、実は人間の側からの声の奥に裏づけをもって推進させている。そういった立体的な対話が詩篇です。

私は大体3分の1くらい詩篇の翻訳と解説を試みていますが、途中から預言者に移ったり、最近数年間は、もうすっかり新約になってしまつて、新約聖書をほとんどここで皆さんと学んでしまった。あと残っているのは黙示録だけです。パウロの書翰がちよつと残っているのがありますが、黙示録はすごいところだから、まだちよつとこれはお預けです。最後は勿論、黙示録に私は行きたい。藤井先生は黙示録を講義し終わつて、二週間たつて天上に逝つちやつたですが。

そういうわけで、しばらく詩篇をやる。どこから預言書に移るかわかりませんが、ある程度、詩篇にしばらく食いついて行きたいと思ひます。

●わがよりたのむ神

今日は第91篇です。順を追つては致しません。その時その時にやつて行きましょう。詩篇の序論みたいなことを言い出したら、とても時間がかかつてしまいますから、それは省略します。

詩篇はご承知の通り全五巻からなりたつていて、モーセ五書と似ている。詩篇の第90篇から106篇までは即ち第四巻です。詩篇のうちの第四の巻で詩篇90篇をやろうと思つたけれども、実はこの間、杉本君との祈祷会で90篇をやってしまったものですから、それで今日は91篇ということになった。またこれもひとつの摂理と思う。第四巻の第二の歌、詩篇91篇です。

前にちよつと書いておいた分類表がありますので、ご参考までにここに掲げたんですが、



詩篇をその内容から分類しますと――これは大体ですよ、勿論――この讚美の詩篇がこういうわけです。……（詩篇の分類は省略）。神の即位のうたを年のはじめに神殿で歌った。今日の91篇は、その巡礼の歌の種類に入っております。……

¹至上者いとたかきもののもとなる隠れたるところにすまうその人は全能者の陰にやどら
²われエホバのことを宣のべて エホバはわが避所さけどころわが城わがよりたのむ神
なりといわん

ちよつと不明瞭な言い方ですね。91篇のこの日本語の訳はあまりよくない。新しい訳（口語訳）ではどうですか。

「いと高き者のもとにある隠れ場に住む人、全能者の陰にやどる人は²主に言うであろう、『わが避け所、わが城、わが信頼しまつるわが神』と。」

大体、新しい訳でいいけれども、どうも弱いですね。「言うであろう」なんて言われたんじゃ、もうガツカリしちゃう。この「であろう」という言葉が非常に多いような気がするけれども、そんな想像しているような角度ではない。もつと強く訳すべきだと私は思う。

「至高者を隠れ家として住まっており、全能者の陰に宿っている者は、ヤーヴ
エーに言うのである。わが避所さけどころわが城わがよりたのむ神よ」

「神よ」は、あるいは、「神なりと」そう言うのであると。「であろう」とか何とか、そんな呑気なんじゃない。私は貴神あなたによりたのむという。

「わが避所さけどころわが城わが神よ、われ汝によりたのむ」
と訳してもかまわない。

「わがよりたのむところの我が神よ」

と言つてもかまわないですが、そういった信頼して叫んでいるのに、「であろう」じゃ困る。「いと高き者」とは「エリオン」といい、「全能者」は「シャッダーイ」という言葉です。

「エリオン・シャッダーイ」「至高者・全能者」

と、みなこれはイザヤ書に出てきます。こういった詩篇が既に預言者の世界を通じて表現されていることが、そういった言葉の使い方からもわかります。この詩篇はまだ皆さんとここで読まなかったけれども、これは詩篇の46篇と詩篇91篇とが内容的に姉妹篇であるように、非常に力強い神信頼の歌であり、また信頼における勝利の歌です。46篇はあまりにも有名ですが、

「エホバはわが苦しめる時のいと近き助けなり。我らの神は固き城である」

という、あの宗教改革の有名な進軍の讚美歌をマルチン・ルッターが作りましたが、あれは即ち46篇によつてつくった。この91篇もパウル・ゲルハルトという人の有名な讚美歌がある。そういった46篇と相呼応するような力強い詩篇です。

¹至上者いとたかきものを隠れ家とし住まい、全能者の陰に宿っている者は

という。そこに「住まい」「宿る」という言葉がある。非常に「その中に住まい、宿る」と



いう。それは何かというと、相手は「全能者」であり、「至上者」である。

「至上者の陰に、その隠れ家に」

というような言い方です。

さきほど、私は詩篇19篇を読みました。

「エホバの栄光が全地に満ちている。その言葉は語らず言わざるに、あまねく響いている」

という。神の「かげ」というのは何かというと、何か暗いところじゃない。「神のもとに隠れる」とか、「その住まい給うものの処に」とかいうのは、これは光の中でありまして、「神の至上者のかげ」とか、「その下に」とかいうのは、

「神の光のもとに、その中に」

です。宿る世界は、宿っているところは、これは光の中です。太陽の光の下に我々は集っている。光のかげです。光の中に住まう者です。それではそれは何処だというわけですが、それは少し後に致しまして、事実「隠れる」とか何かいうと、暗いところに行っちゃうように思うけれども、そこは間違わないようにしてください。我々が神の許に住まい、また宿るといふ世界は最も輝かしい、最も光の満ちている処であるということを忘れないように。「私の隠れ家」「私の城」「私の神」という日本語の訳で、

「わが避所、わが城、わがよりたのむ神」

というようにこの人は叫ばざるを得ない。そのところに特に「よりたのむ」という字が出ている。その「よりたのむ」という字に、ここではちよつと注目を要する。信仰は、「ある事柄を信仰する」のではない。神に信頼すること、神によりたのむことです。神に一切信頼することが即ち、この信仰の本領です。

そは神なんじを狩人のわなと毒をながす疫癘よりたすけいだしたもうべければなり

「そは神は」とは原語では「そは彼は」です。「狩人のわな」とか、「毒をながす疫癘」と言われているところの対象はサタン的なものです。サタン的なものの誘いや落とし穴といったもの、また害毒の病、そういったものから助け出し給うからである。

かれその翮をもてなんじを庇いたまわんなんじその翼の下にかくれん

神様が「その翮をもて」というような言い方をしてあって、ちよつと近代人にはおかしく響くかもしれませんが、これは旧約ではしよつちゅうこういう言い方は出てくる。例えば

申命記32章11節に、

「鵬のその巢雛を喚起しその子の上に翱翔ごとくエホバその羽を展て彼らを

載せその翼をもてこれを負いたまえり」(申命記32・11)

とあります。神様の守りが、また導きが鷺の翼によってするようであると。鷺の翼は鳥のうちで最も強いものでしょうから、そういった譬えをもって言われている。具体的に神の



守りというものを、「鷺の羽をもつて彼らを守らん」というわけです。

「親鳥が雛鳥を囲うように、エルサレムをいかにその翼の下に入れようとして願ったか、けれどもお前たちはこれを受けなかった」

と、キリストが嘆かれた。「ああエルサレムよ、エルサレムよ」という有名なあの言葉です。あれもやっぱり翼でしたね。

「噫エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝鶏の己が雛を翼のうちに集むるごとく、我なんじの子どもを集めんとせしこと幾度ぞや。されど汝らは好まざりき。」(ルカ13・34)

ルカ伝13章の終りの方です。キリストが橄欖山にてエルサレムを望んでおられる絵があります、あれが「ああエルサレムよ、エルサレムよ」です。

●神の信実

その真実は盾なり干なり

神様に信頼した内容は何かというのと、「神の真実」――この「真」の字も実は「信」の字を書いた方が適切だと思う――「信実」という字は「アーメン」という字から来ている「エメツ」という。この場合は「アミットウ」という言葉になりますが、「汝のまこと」、その真神の真(信)のことです。

汝のまことが、神様の信実が自分の信頼の根拠である。自分の信頼にたよるのではない。信頼といっても、我々は信頼というけれども、我々の信頼が信念みたいになつたら、おかしなことになっちゃうですよ。信頼するのは、自分が信頼するに足りないものであるから。私は自分が信頼するに足りない。自分の信仰が当てにならない。信仰が当てにならないければ、自分の信頼なんて当てにならない。

当てになるのは神の信実、彼のまことです。彼の誠が本当に当てになるから、彼のまことを当てにすることが、即ち信頼なんです。

5夜はおどろくべきことあり昼はとびきたる矢あり 6幽暗にはあゆむ疫癘あり
り日午にはそこなう勵しき疾ありされどなんじ畏るることあらじ

彼のまこと、そのまことは盾であり干である。どんなに矢が降りそいで来ても、槍が来ても、この盾によって、神の信仰という盾によって、これを防ぐことができる。サタンがどんなに攻めてきても、病にどんなに苦しめられても、神の信実はそれから必ず守ってくれます。

その次は、むしろ強く「ローティウー」という、

「懼るるなかれ」

という言葉です。「汝、おそるるなかれ」と、それを先にもつて来たわけです。新約聖書にも出てきますね。



「汝、おそるるなかれ」

と。マリヤも畏れた。この「おそるるなかれ」という言葉が5節の一番先です。

「⁵なんじ^{おそ}畏るる勿れ、夜はおどろくべきことあり昼はとびきたる矢あるとも（おそるるなかれ）。⁶幽暗^{くらき}にはあゆむ疫癘^{えやみ}あり日午^{ひる}にはそこなう^{はげ}勵しき疾^{やまい}ありとも（おそるるなかれ）」

と、みな「おそるるなかれ」にかかつてくる。昼となく夜となく我々は害敵の危険にさらされている。それがこの魂に向かう攻撃であろうとも、また肉体に向かう病の如き攻撃であろうとも、その霊肉どちらに向かつて外側から攻撃がきても、これをおそるるなかれ、「汝、おそるるなかれ」という。

⁷千人はなんじの左にたおれ万人はなんじの右にたおるされどその災害^{わざわい}はなんじに近づくことなからん

汝に近づくことはないだろうと。

●神の栄光を現わす使命

この間の岐阜の原田君というのは、本当に九十九死に一生を得て帰って来た。戦地で本当に新しく生命を賜ったような人です。南方の熱病の中を、危険の中を、飢え渴きの中を通って来た……。武蔵野幕屋に来た時は青い顔して来た。けれども、彼がこの福音を得て、この間のクリスマスなんか、まるで別人のような顔をして来た。これは即ち原田君が本当に汝のまことによりたので、悔い改めに来たから、右に倒れ左に倒れても守られてきた。私たちが今日まで生きながらえて、あの大戦争のあとを今日までお互いに生き長らえているということは、我々自身が何かとり得があるからではない。大いにとり得のある人がたくさん犠牲になってしまった。まことに取り返しのつかない人がたくさん倒れて行った。

ですから、私たちがとにかく生き残っているということは、私たちが絶対に存在の使命を負わされている。私たちは責任を負わされている。倒れて行った人たちに対して、今、日本に残れる人たちは、我々は責任を負っている。それをいい気になつたらとんでもない話です。万人は右に倒れ、千人は左に倒れても、守られたのは、我々の存在は一人ひとりに使命がある。神の守りは、神に守られているということは、恵みであります。恵みということは、御利益^{ごりやく}ではない。恵みは聖書の世界では絶対、御利益ではない。「恵まれる」ということは、その人は、

「神の栄光を現わす使命を負わされている」

ということ。その自覚なくして、恵まれているなんて思ったら、それは御利益宗教になる。

我々はただでは死ねないんです！ 皆さん、ただで死んだのでは申し訳ない。私たちは「神に守られている」ということは即ち、



「神の栄光を現わすべき使命を負わされている。神様に負い目を負っている」

ということ。そういう責任というのはまさに負い目という、使命を負わされているということ。しかしながら、それは神の栄光を現わす使命ですから、これは本当に嬉しい。御利益的なものは、本当の栄光には行かない。本当の栄えというのは、神様の栄光が現われることが本当の栄光です。私たちの側からそれを本当に感謝し、讃美することです。だから、詩篇は讃美歌なんです。

「みな倒れて行つた。俺だけは助かった。俺はえらい」

なんて、そんなのはとんでもない話です。「助かった俺はえらい」じゃない。

「神様に使命を負わされている。人を助ける使命を負わされている。神の栄光を他人に伝える使命を負わされている」

ということです。

●天則靈法・必然・自由

8 なんじの眼はただこの事をみるのみなんじ悪者のむくいを見ん

これは旧約の世界ですから、報いの観念はユダヤ人に非常に強い。報復観念です。いい意味においても、悪い意味においても、報いというのは、キリストによれば、ただご褒美というようなことではありません。正しいものが正しい者としての結果が現われることで、「結果」とは「結び」「果^み」です。報いというのは、しかるべく結ぶ実である。山上の垂訓に「幸福^{さいわい}なるかな……」

と書いてあるでしょ。

「¹¹我がために、人なんじらを罵^{ののし}り、また責め、詐^{いつわ}りて各様の悪^{さか}しきことを言うときは、汝^{きみ}ら幸福^{さいわい}なり。¹²喜びよろこべ、天にて汝らの報いは大いなり。

汝等より前^{さき}にありし預言者たちをも、斯く責めたりき。」(マタイ5・11～12)

「わが為に、福音のために、ののしられまた悪しきことを言われた時に、お前たちは幸いである。天において報いが大きいのであるから」

と。今は、ののしられ、受け入れられず、白眼視され、いろいろであります。けれども、

「天においては報いは大いなり」

と。天上において天報は——これはどういうことかということ——報いは、実はもう来ているんですよ。神様に、

「よし。それでよし」

と。神様に「よし」と言われ、「正しい」と言われ、「義」と言われ、「正」と言われるとは、神様に「義とされる」ことです。神様によしとされることは、それ自体が実は報いなんです。それ自体が報いの中核です。神に「義^{よし}」とは、キリストに「よし」と言われることは、

「お前の信仰は本ものだ」



と、こう言われることは最大の報いの中心が来ている。それはやがて時が来ると、その「よし」という事態が、隠れたる「よし」という事態が外にあらわに現われていく。即ち、それが報いです。しかるべき実がみのつていく。花が咲いていく。要するにこれは、神様から来ているところの核が、種がだんだん展開して、神の栄光が現われていく。

「報いが大いなり」

とは、

「神の栄光は大いなり」

ということさ。だから、問題は、

8 なんじの眼はただこの事をみるのみなんじ悪者のむくいを見ん^{あしきもの}

即ち、悪しきものの亡びていくのを見んと。善がさかえ、悪が亡びていく事態を見る。あるいは、それは地上では見えないかも知れませんが。見えないでいった人はたくさんある。歴史は、時は必ずそれを解決して、よこしまなことをして栄えているものは必ず亡びていく。これは天則ですからね、天の法則ですから。世界がどんなことをやっていようが、どの国がどのようなことをやっていようが、それは天則に反すれば必ず亡びる。これはもうはっきりしている。物理の法則は破るわけにいかん。風が吹けば木の葉がゆれる。

「私はゆれない」

というわけにいかない。それと同じように、道德の世界、魂の法の世界も、破ることをする自由はあるが、天則に則^{のつと}ってないような自由だったらば、それは必ず不自由になる。その自由は一切が破れていく。天則に則るとは、これは申し上げている通り、必然ですよ。必然において実^{じつ}は本当の自由がある。

天則、必然、自由というものは、それは本物であつて、素晴らしければ素晴らしいほど、実は人の目には隠れている。これはもう本当に霊の世界ですから、天則、靈法です。この天則靈法の世界は犯すべからず。人間がどんなに法律を作ったって、この天則靈法の世界にはかなわんです。それで、人間の作った法律は破らなくても、天則靈法はみな破っている。だから、

「義人なし、一人だになし」

という。みな万人は罪びとであるとは、天則靈法にのつとれない。私たちは、だから、「罪びと」なんです。犯罪人ではないけれども、私たちはみな罪人です。「義人なし、一人だになし」とパウロが言った通り。

●真言・真法

ただ一人の義人がいた。これはナザレのイエス・キリストであつた。これは本当に天則靈法にのつかって生きた人です。だから、ものすごい「必然」であり、ものすごい「自由」である。神の栄光が、福音書に現われているイエス・キリスト以上に栄光を現わした人が



東西古今にいろか！ 比較研究したって、かなわないですよ、イエスには絶対にこのイエスという桁違いの人物はどこが素晴らしいかという、彼は、

「自分は何もできません、何も言えません」

と言つて、自分は空しく、絶無にしていた。そしたら彼は天則靈法の人になった。

真言宗に素晴らしい言葉があります、

「五大に皆響き有り、十界に言語を具す。六塵悉く文字なり、法身は是れ実相なり。」

(出典… 声字義。空海)

「五種の存在要素(五大)にはみな響きがある。十種の世界(十界)は言葉をもっている。六種の認識対象(六塵)はことごとく文字である。さとの当体(法身)とは実相のことである。」

なんていう。本当にキリスト自身が即ち「真言」である。彼は神の真の表現体、言である。だから、

「^{はじめ}太初に言あり、言は神^{とも}と偕にあり、言は神なりき。」(ヨハネ1・1)

即ち、彼が真言、また真法ですよ。即神、聖意体现した、聖意体现のそういった世界が法則の世界。我々の法則にのつかっている実が現われること、それを報いというんです。法則に乗っからない実の報いは、

「^{悪しき}悪しき者は亡びていく。悪しきものはその報いを見ん」

というのは、天則からはずれていくから、それは亡びていく姿を見るところです。「あいつはいい気味だ」といつているんじゃない。神様の法則に従わなければこういうことになるという、これは審判^{さばき}です。審判を見るわけです。

9 ^{なんじ}なんじ曩^{さき}にいえりエホバはわが^{さけどころ}避所なりとなんじ至上者をその住居^{すまい}となしたれば

そうですね、ここはこれでもいいですが、「いえり」という言葉は実はない。

「エホバは我が避所なりと言った、そう言ったのは汝至上者をその住居としているからである」

「至上者をその住居とする、神様を住居とする」

なんて妙な言い方ですね。神様を住居とするとは即ち、

「神の光の中に自分が住まう。神の靈気の中に住まう」

と言つてもいい。靈光であり、靈気である、神の靈気を呼吸している。私たちは太陽の光をあびて、空気を呼吸して生きている。私たちの本当の魂の世界は、神の光をあび、神の靈気を吸っている。

「神、人の中に氣息^{いき}を吹き入れ給えば、人すなわち生けるものとなれり」

とは即ち、我々は生けるもの、それが至上者を住まいとする、ということです。



●幕屋の構造ABC GX

10 災害^{わざわい}なんじにいたらず苦難^{なやみ}なんじの幕屋に近づかじ

今日は「勝利の幕屋」という題です。今日から私は二、三回続けて幕屋論を展開しようと思っています。今日はその緒口^{いとぐち}です。幕屋論とは即ち教会論です。これは私が病気の時、愛読したヒルティの『眠られぬ夜のために』（ドイツ語）——岩波に訳も出ていますが——この本を読んでいて、この本から直接うけたわけではないですが、読んでいるうちに、4月28日のところの余白にメモを書いた、「神の幕屋について最初の構想を得た」と。私は寝ていて1942年4月28日に、イスラエルの荒野の民が幕屋を張って歩いていることに気がついた。

この構造（註：三角錐体ABC Gの図を書く。ABCは底面、Gは頂点、GXは底面へおろした垂線）は「無教会神学論」（註：著作集第3巻『無の神学』／第二部「無の神学への道」／第四章「無教会神学論」（1949年8月18日）で私はいつべん書いたことがある。人間の普通の社会はABCで表わします。一番簡単な構造は三角関係です——いわゆる三角関係ではないよ——ABCで複数ですから。社会は、社会も国際関係もみなこれ、ABCです。ところが、これをいくら平和にしようとしても平和にならないんです、ABCでは。それで、実はここにG（神）という頂点を忘れていた。GA、GB、GCというこの線を忘れていた。GA、GB、GCのGは「ゴッド」神様のつもりです。これまた立体になつて、三角関係になる。Gの頂点からABCの平面に垂直におろして、ぶつかるところをXとする。キリストのXです。GX（神―キリスト）、これは大黒柱です。キリストは、ナザレのイエスという人は、自分を平面の中におり立ったのです。Xは、本当はこっち（G）の方にあつた。G・Xは神と共にあつた。神と共にあることを捨てて、この世に下り給うた。そして、

「十字架の死に至るまで従い給えり」

と。ピリピ書に書いてある。これがXというんです。このGXという線、これで初めてテントは立つ。GA、GB、GCだけでもダメなんです。これはGXという柱「十字架」が立つてないと、風に合うと吹き倒されてしまう。

これが面白いですね。いわゆる神秘宗教はGA、GB、GCだけでいい。神と合一する。GAが一つの合一体となる。それは神人合一的な瞑想をして深く神と一つになつてしまうような所謂「ミステシズム」（註：神秘主義（mysticism）とは絶対者（神、最高實在、宇宙の究極的根拠などとされる存在）をその絶対性のままに人間が自己の内面で直接に体験しようとする哲学ないし宗教上の思想）です。それもある角度からは結構なことでしょう。ところが、真に聖書が啓示しているところの神は、人間がこの神と一つになれるようなそんな神秘ではない。聖なる神の前には——この間、武蔵野幕屋のクリスマスでイザヤ書6章をやったでしょう——あのイザヤ書最大の預言者は、

「³たがいに呼びいいけるは聖なるかな聖なるかな聖なるかな万軍のエホバそ



の栄光は全地にみつ。⁴ 斯^{かく}よばわる者の声によりて闕^{しきみ}のもとに揺^ゆりうごき家のうちに煙みちたり。⁵ このとき我^わいえり 禍^{わざわ}いなるかな我ほろびなん 我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢^{けがれ}たるくちびるの者なるにわが眼ばんぐんのエホバにまします王を見まつればなりと。」(イザヤ6・3〜5)

と言って、聖なる光の前に目がくらんで、ぶっ倒れてしまった。パウロは復活のキリストにぶつかって、ダマスコ途上の道の上にぶっ倒れたではないですか。太陽の光では私たちは倒れませんが、神様の光には私たちは倒れる。ですから、その穢れを潔めなければ起^たつことはできない。そこで、ケルビムが、火焰天使がやってきて、イザヤの唇を焼け火箸でもって焼いた。そしたら、彼は、

「⁶ 爰^{こゝ}にかのセラピムのひとり鉗^{ひばし}をもて壇の上よりとりたる熱炭^{あかきひ}を手になずさえて我にとびきたり、⁷ わが口に触れていいけるは視よこの火なんじの唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれなんじの罪はきよめられたりと。」(イザヤ6・6〜7)

という天使の声がして、そして彼はやつとそこに坐ることができた。そして「イザヤよ」と呼ばれた時、

「⁸ 我またエホバの声をきく曰くわれ誰をつかわさん誰かわれらのために往くべきかとそのとき我いいけるはわれ此にあり我をつかわしたまえ。」(イザヤ6・8)

「我ここにあり」と答えることができた。神の前に焼かれなければ、神の前に立つわけにはいかない。その様な素晴らしい光です、さきほどから光と申し上げているのは。

このGA、GB、GCということ。しかしながら、私たちのようなこんな人間でも神の似像^{にすがた}に創られている。どんな罪人^{つみびと}であつても、私たちは本来、神の似像である可能性は残っているけれども、その実力はない。神に立ち帰る可能性は残っているても実力はない。我々も善を思います。パウロも善を思つて慕うけれども、どうしても悪の法があつて、これに勝てない。善の可能性がどうしても悪の実力にかなわない。

「噫われ悩める人なるかな、此の死^{からだ}の体より我を救わん者は誰ぞ。」(ロマ7・24)

というのが人間の失われた実存です。失われたる実存は哲学的実存ではどうにもならん。失われたる実存だから、近頃、自殺者も大分出ますね。私の或る学校の生徒にも自殺者が出ましたが、彼は私に年賀状までくれていながら、私の処にちよつと相談に来てくれればよかったのに。神様はこの失われたる存在をどうしても回復なさろうとして、かかってくるのが神からの恵みです。すべての人に恵みがきている。

「私は、神は信じない」

と、いくらでも言っていればいい。



「私は神様なんか信じない」

なんてのがたくさんいます、今の青年の中には。いくらでも駄々こねていればいい。ただし、神様の方からはちゃんと実力の恵みは来ている。信ずると信じないとかかわらず、恵みは来ている。陽の光は照っている。どこの隅までも陽は照っている。誰でも空気が吸っている。神様の恵みは、神様は居ないと駄々こねている人の魂にもみな、神の恵みは来ている。このことにいつか気がつかなきゃならない。気がつかなかったら何処へ行くかしれません。

●愛の貫流・環流・交流

そういうようなものが来ているが、しかし、私たちはこの恵みを正しく受けるためには、どういう構造になるかというのと、私たちは神様の前には、どうにもならないということです。いくら聖書を読んでも、いくらキリストはどうかのこのと解りましても、聖書のことをどんなに勉強して研究しても、本当にキリストというものに私が支えられるに至るまでは、この大黒柱「神―キリスト」が自分の実存の中に立つまではどうにもならない。

パウロはあんな素晴らしいパウロだったが、キリストに引っくり返されるまではダメだった。素晴らしい道徳的、宗教的チャンピオンであるパウロも、神様との本当の交わりの世界でなくて、己を義としていたからとんでもない間違いをした。即ち、自己義認というやつがとんでもない間違いです。

かの富める青年から「善き師よ」とキリストが言われた時、

「何ぞ我を善しとするか」

と答えられたでしょ。キリストは神の生命を得て生きていた。ナザレのイエス・キリストは神の善意を戴き、それを100%に現わしていた。しかし、これはどこまでも神のものとしていた。私^{わたくし}しない。どんなに善きものも私したらダメなんです。

「ああ、あの人は素晴らしいな」

と言っても、どんな素晴らしい私も私されていたら、ちっとも素晴らしい。素晴らしいものほど危ない。そういう、キリストは何でもなくなってしまうんです。「私」は何でもないから、申し上げている通り、「無」なんです。無においてこそ実は無限が現われるんだということなんです。

そういうGA、GB、GCという線が立つて、これだけではいわゆる神秘宗教だし、この線「GX」がなくて、A・B・Cだけで立っていれば、唯物史観——唯物までいわなくても——一般に普通の日本人がもっているところの人生観、社会観がこのABCという平面的なものです。「社会、社会」と言っていますね、小学校から。

「人間は個ではない、社会である」

と。結構ですよ、社会を構成していますよ。けれども社会を構成している個というものは——個は他のものと置き換えることができない。AはBをもつて置き換えられない。Bは



Cをもつて置き換えられない——絶対なんです、「個」というものは。個というものの絶対性を知らないで、ただ相対的な「社会、社会」というようなことを言っているからダメなんです。

しかし、その絶対性はどこから来るかというと——それ自体を絶対的に見たらとんでもない間違いになる——この絶対性はこのG「神」から来ている。GAであるとき初めてこれが絶対性なんです。もう少しはつきりいうと、GXAなんです。GXA、GXB、GXCであるときに初めて、A・B・Cというものの個の存在が本当の意味において出てくる。単なる相対的社会といっているのも間違いだし、個人主義的に自己というものを何か絶対的にしていくのも間違いだし、GA、GB、GCといって、ただ神秘主義的な世界にだけ入って行けばこの横の繋がりはなくなつて、山に隠れてしまうような隠者になつてしまふし、どれもこれもいかん。私たちには、聖書の世界は、GXという線が立つて、即ちGXによって支えられているところの、GXAであるから、どうしてもBと繋がらざるを得ない角度をもつてくる。それからBとCと、何故その角度をもつかというと、ここにXというのがあるから。私たちは本当にXの力によって、贖いの力によって本当にこれが出てくる。

それは何かというと、もう一つ申し上げると、GXという線の性格は愛であるからです。愛の太い線であるから、この流れは、上から貫流してくる。ここにこの貫き流れるのは今度は横に流れます。これは横に環のように流れる。環流する。上から貫流してくる流れがABCにグルグル環流する。お互いに、このGXという線が立っていれば、このキリストの愛が、贖いが、これはグルグル回転し、交流する。神と交流している、愛に交流している世界は、これは祈りの世界です。神様との深い交わりの世界です。神様との深い交わりのできるのは、このキリストによるのです。

●みなキリストの体

キリストに贖われてパウロは、

「キリストに贖われたる存在であるから、アバ父よと呼ぶことができる」

と言った。「父よ」と言つて呼ぶことができるのは、我々はキリストに贖われたる罪びとであるから呼ぶことができる。いきなりは呼べない。イザヤと同じように。イザヤも旧約の世界ですから、天使の霊的な世界において、天使によって焼き尽くされたという神の前の潔めというのが上から来たから、イザヤは立つことができた。その潔めは新約においては事実、キリストにおいて現われた。

だから、この幕屋の構造は何といつても真理です。ブルンナーさんが『教会の誤解』という本の中で言っています。幕屋ということは言わないけれども、これに似たことを言っておられる。私はブルンナーさんの本よりかずつと前に、数年前にそのことは言っている。私みたいなものが言うものだから、



「小池みたいなあんなのは、何を言っているか!」

というようなもんで、無教会でも私が何か言うと、黙殺されてしまうだけの話。いいですよ、黙殺されても。私は認められなくなった。本屋からも頼まれなくなった。

「あいつは少し変わってきたから、あの信仰は危ないから」

と、書かせない。ところが、上からちゃんと真理の「核」が来ている。

「偽りてさまざまの悪しき事を言われる時、汝ら幸いなり。天にてその報いは

大いなり」

と。神の栄光は現われるぞという。

皆さん、私みたいな変り者の集会に来て、いいですか、一体。

「少しこれは具合が悪い」

と思つたら、さつきと出て行つてくださいよ、私は決して皆さんをお留めしないから。私は一人でもいいから。けれども、本当に自己を空しくしていく角度をもつてキリストの世界に入つて行つたらば、私は聖書を事実読めてきたから、止むを得ざるなり、仕方がない。これを拒むなら、私はキリストを拒むことになる。全世界の神学者が寄つてたかつて何と言いましようとも、牧師さんが何と言いましようとも、キリストを拒むわけにはいかん。皆さん一人ひとりがその角度に立つたなら、我々は握手せざらんと欲すれどもあたわず、魂の握手ができる。即ち、GA、GB、GCを本当にキリストにおいて受けとつたらば、もうABCは驚くべき実存共同体にならざるを得ない。「実存共同体」という言葉も、私は数年前に使っている。この実存共同体にならざるを得ない。それはパウロがコリント前書12章で、

「みなこれはキリストの体である」

と言っている。クリスチャンとはみなキリストの体である。体を構成している有機体であるから、それぞれ役割は、性質は違う。その現わすところのわざは違う。また、コリント前書14章でも、その賜物はさまざまであるけれども、大事なことは、パウロもそこで言っている。

「聖霊は一つ」

という魂の事態、み霊です。さつきから、交流すると言っていますが、一体何が流れるんですか。愛の生命という、正にキリストの、神の霊なんです。さつき言った「霊気」「霊生」、霊の生命が流れていないような、教会や、無教会や、あるいはカトリックであるとするならば——みながそうだなんて言いやしませんよ——そういうのがあるとするとするならば、それはどんなに立派そうに見えても、それは死んでいます。その集会は死んでいる。

問題は、ブルンナーさんも『教会の誤解』という本の中で言っておられる通り、キリストが、また使徒たちが展開していたところの本当の意味においての——ドイツ語でいうところの「ゲマインデ」(Gemeinde)——「エクレシヤ」「教会」というものは、そういった制度的な



ものではなかった。本来の姿は——制度は後から出来てきたけれども、制度の問題はまた別なときに致しますが——教会の本質の問題は、どこまでもここにキリストの霊が各個体において本当に生きているか、そういう共同体であるかどうか。しかも、キリストの霊は共同体において真に展開していく。単なる個ではあり得ない。この神・キリストの中に私たちが深く個Aとして入っていくと、それは同時にBと共にならざるを得ないのです。また、こういったA・B・Cという、キリストの生命を息吹^{いぶ}いているところの集団に、そういった共同体の中に或る一人のひとが入ってくると、この生命体の中に入ってくると、この生命体の中でもつて、これによつてこの生命に化せられていくわけです。だから、「個」でありながら、これは必ず全的になつていくんです。

● 個即全

「個」と「全」ということ。いわゆる全体主義なんかを言っているのではない。個と全というものはやつぱり相即する。だから、旧約でも詩篇で「汝」というときに、「汝」は一人の個人であると同時にその集団であり、イスラエル民族であるという、こういった構造をよく持っている。旧約を読みましても、これを「個」として限ることも、「集団」として思うことも、それも一面的なことであつて、「個」であると同時にそれは「集団」になる。「集団」であると同時にこれは深い「個」をもっている。そういう、弁証法的といえますか——単なる弁証法ではないけれども——そういった相即的な関係です。個即全という関係において共同体であるところに、それが即ち何故かという^{ゆえん}と、GX(神・キリスト)という線がしっかりと立っているから、これが私が幕屋という所以^{ゆえん}です。

私が幕屋ということ^{こと}を日本で唱導して最初であつたわけですけども、九州の手島(郁郎)さんが大いにこれに呼応してくれているわけです。

これは創世記から黙示録まで動的な姿が実は幕屋、エクレシヤであつて、いわゆる神殿宗教ではダメだということです。いわゆる神殿宗教に化してしまつてすっかり硬化してしまつた時、預言者エレミヤが、

「神殿、神殿というなかれ」

と言つて、非常にはげしく攻撃している。

「汝らのうちに本当に神が宿り、生きるのでなかつたならば」という角度から、預言者はみなこれ——いわゆる問題は形ではないんです——問題は形の中に居る質が本ものか、ということです。無教会の歴史というと、

「教会は形式的になつた。自由がない、独立がない」

というようなわけで、内村先生が大いに自由独立を言われたわけですが。そして、

「聖書に直結しろ」

と。マルチン・ルッターと同じように。そして本当に生きていくから、いいんです。無教



会の方向は正しい方向だと思いますよ。思いますけれども——私も永いこと無教会に育ってきた。教会のことはあまり知りません——ところが、その無教会というのがだんだんして、いるうちに、

「信仰、信仰」

といって自分の方に、何か信仰が人間的にだんだん化してきました、信仰的英雄みたいにとどんだ。非常に個人主義的になってきた。これは一般にそう言われて、また無教会においてもその欠陥をある意味において認めざるを得ないという始末です。

私は決して無教会の先生方や集会の悪口を言っているのではない。全体における在り方のただ欠陥を言っている。そして、集会というものが何か御言の講義、聖書の研究ということに、まるで学校の延長みたいになる。学校だって私は決してそういうようなものではないと思う。深い交わりの世界でなくなってきたしまっている。聖書の研究のしっぱなしというようなことで、それを誇りとしているような角度が大分見えている。みな自分で研究して一人立ちになる。これが無教会の大体の気分です。そうすると、

「私はギリシヤ語、私はヘブライ語」

というように——口では言わないけれども——研究して、聖書の研究知識が深いということとが、自然に何か誇りになっていくようなことになる。人々をちよつと白眼視してみたりする。お互いの間が何か妙に冷めたかったり、人間的な繋がりがただあるというだけです。それでは、無教会がただ学問をもつて世に一つの存在を広めているというようなことでは、これは本当の福音の、キリストが望んでおられるところの、使徒たちが身をもつて証して行ったその姿とは違うんです。

●キリストの生命の現われ

どうして、そのズレをだんだんきたしてくるか。もし教会において何かズレがあるとするならば、教会におけるズレは何処から来ているか。問題は、このキリストの生命、聖霊の世界です。だから私は、幕屋は実は

「聖霊の幕屋、み霊の幕屋」

と言いたい。表向きそういう言葉は出さない方がよろしいと思うから、「み霊の」とは言いませんけれども、本当の意味において、これはみ霊の幕屋です。聖霊ということこそ、みだりに使つてはいかんが、み霊の幕屋なんです。

それは事実、私たちが真にキリストのみ霊の幕屋であるならば、人間の営む存在というのはみな相対的なもので、どれもこれも破れですよ。完全なものなんか一つありません。問題は、その破れの中に——お互いに見栄えのないダメなものです——その中に本当の太陽の光が、キリストの光が来ているか。キリストのみ霊が、霊生が通っているか。み霊は愛です。これが本当に通っている時、初めてそれがどんなに小さな幕屋であろうとも、どんなに大



きな幕屋であろうと、大小にかかわりなく、その時初めてそれは本ものです。それが教会であろうと、いわゆる無教会であろうと、カトリックであろうと、何であろうと。だから、いわゆる「世界教会」というようなことを画策する必要は何もない。みなそれぞれの教会で結構です。問題は、

「そこにキリストのみ霊、生命が、愛の生命が本当に流れているか」ということです。

この表われ方は各個人によってさまざまです。いろいろです。ある人は預言の霊があるでしょう。あるいは神癒的な、あるいは異言的な、あるいは知識の霊というようなもの――知識も賜物である――またいろんな仕事をする技能の方もあるでしょう。様々の賜物がみ霊によって展開していきます。

パウロがこれを、

「徴と不思議によりて」

とよく言っている。徴と不思議はいろいろに現われている、原始キリスト教において。もう少し歴史的にいうと、ユダヤ教がキリスト教の前の前身であった。ユダヤ教はエルサレム神殿中心の宗教だったでしょ。非常に誠律的な宗教だった。エルサレム本山がある。だから、このエルサレム本山を伝統的に守っていくような角度のキリストの弟子たちも居た。ヤコブ、ペテロ、ヨハネというのは、この本山の三柱みたいなものです。

パウロは直接のキリストの弟子ではないから、ペテロとパウロが割礼の問題で争ったことがガラテヤ書に出ている。今でいうと、洗礼の問題になる。それで、もちろんヤコブもペテロも、このペンテコステ以来、み霊を頂きましたから、パウロの言うことに真理を認めたことになりましたが。問題は、洗礼とか聖餐とか、割礼とかいうようなこと自身は一つの表現であって、それはしてもなくても信仰の救いの問題には変りないことをパウロ自身が言っています。表現することは結構です。けれども、それが救いの問題にかかわるかという、それは然らずです。問題は何処までもキリストによって本当に新しく更生することです。

もし洗礼をいうなら、キリストの霊のバプテスマを本当に受けるなら、これは本当の洗礼です。キリストも洗礼を受けました。洗礼のヨハネから悔い改めのバプテスマを受けた。キリストは悔い改めの必要がなかったのに、彼はバプテスマを受けられた。けれども、彼はバプテスマを受けた時に、み霊が来てしまった。即ち、霊のバプテスマを受けられた。そして、私たち悔改める必要がある者のために、彼は悔改めのバプテスマを受けながら、我々を本当にどん底で、ヨルダンの底で受けながら、私たちに新しい世界を開示した。それはみ霊のバプテスマです。

問題は逆に制度をどのように生かして行くものであるか。在り方にはある意味で、或る制度もなければ困る場合もあります。事実、キリスト教がこれだけの歴史を通じて保つ



てきたのは、或る一つの制度というものが、或る役割を果たしているのは事実だと思います。けれども、本当の事実は制度にあつたのではない。とにかく、その中に或るときは氣息奄々であつたかもしれないが、しかし本ものは——その制度とかかわりあつたかなんか知らないが、いろんな場合があるでしょうけれども——本当のキリストの霊が、エクレシヤが、キリストの体が歴史を通じて体としてのエクレシヤが生きてきたからです。

マルチン・ルッターが、

「見えざる教会、見える教会」

と言いましたが、実は事実みな見えているんです。私たちは現に

「武蔵野幕屋」

という見える教会である。見える教会であるが、見える事態をいくら完成しようとしたって、ダメなんです。見える教会であるが、これは何処までも破れの教会である。破れの教会の中に本当の、見えないけれども現実にあるところの世界は、これはみ霊なので、具体的な姿の中に具体的な見えないものがある、というのが即ち実存共同体の観念に非ざるところの現実である。

ですから、福音というものは、こういった一つの集合体において、共同体において展開していく。「キリストの体^{からだ}」という事実をもって、事実その体が生きている体です。私たちはお互いさま、病気を、弱さをもっている。いつかこの肉体は死にますよ。そういう破れた関係ではないですか、私たちは。パウロはそのことも、肉体のことも幕屋といった。

「この幕屋は亡びていくけれども、亡びないものがそのあとにある。日々になんたなる生命がその中にある」

と言った通り——私たちの具体的な存在はそれ自体大したものではない。だが、その具体的な亡びゆくような存在の中に、亡びいかざるものが本当にあるならば、やっぱり霊は具体を通して現われるのであつて、観念において掴まれるのではない。だから、信仰の世界も、私たちが真にキリストの生命を身につけなければ、

「キリストは神の子である」

という命題をいくら立派に信じてみたって、これはどうにもならん。それを身につけなくては。身に受けとらなければダメなんです。それがこの聖霊の幕屋なんです。

10 ^{わがわが}災害なんじにいたらず ^{なやみ}苦難なんじの幕屋に近づかじ

と。そのようなキリストを本当に私たちのうちに受けとっている幕屋であるならば——悩みは来ます、わがわいも来ますけれども——災いも悩みも本当に、私たちのこの至聖所には近づけないんです。この幕屋の至聖所には近づけない。襲つてきても、そいつは跳ね飛ばされてしまう。襲つてきても、それはとかされてしまう。打ち勝たれてしまう。だから、私たちはキリストの光をもつてこれを見る時に、

「^{わがわが}災害なんじにいたらず ^{なやみ}苦難なんじの幕屋に近づかじ」



というのは、相対的には苦しみも、わざわざ来ても、それは私たちのこの幕屋の本殿を、至聖所を犯すわけにいかない。至聖所は絶対に犯されない。これはキリストの世界です。私たちの肉体がストロンチウム90〔註… ストロンチウム90はウランやプルトニウムの核分裂生成物として、高レベル放射性廃棄物やいわゆる死の灰中に多量に含まれる〕でやつつけられ、でも、どっこい、私たちの霊体は、それによつて犯されないのです。霊体はおかされない。そういう盛んなるキリストの生命、一切のものに打ち勝つて行くところの、また一切を生命づけんとするところの、本当の生命へと展開しようとする、キリストの生命の現われ。これをこの幕屋というならば、それが無いような幕屋だったら、私が意味するような幕屋ではありません。

●神の守り

11 いとたかきものそは至上者なんじのためにその使者輩つかいたちにおおせて汝があゆむもろもろの道
になんじを守らせ給えばなり 12 彼ら手にてなんじの足の石にふれざらんため
に汝をささえん

これは有名な荒野の試みでもつて、サタンがこの聖書の言葉を利用して、キリストにやつて来た。それで大事なわけです。聖書の言をつかまえて、キリストを誘惑した。同じ御言が全く逆用されるわけです。マタイ伝4章をちよつと開きますと、サタンが6節で、

『汝もし神の子ならば己が身を下に投げよ。それは「なんじの為に御使たちに命じ給わん。彼ら手にて汝を支え、その足を石にうち当つること無からしめん」と録されたるなり』(マタイ4・6)

「あの宮の頂きから身を投げてみよ。神の子なら奇蹟が行われて、天使が助けくれるから。そしたら私はお前を神の子だと見てやろう」

と。これはサタンの誘惑ですよ。そしたら、イエスは言われた。

「イエス言いたもう『主なる汝の神を試むべからず』と、また録しるされたり』(マ

タイ4・7)

「神様を試みてはいかん」と。神様は素晴らしい奇蹟をなさるからといって、奇蹟の御利益を、奇蹟を御利益と考えると、

「御利益ごりやくにあらずかろう」

なんて考えて、神様を試みたりしたら、とんでもないけがをします。キリストが神に守られているということは、さつき申し上げた「天則靈法」、言い換えると「聖意」を、神様の聖なる意志、聖意を念願している人を神は守り給う。聖意を念願している人を、神様の意志を念願してその意志に従わんとして祈る人を神は守り給うのですよ。この聖意を念願しない角度であつたならば、本当の意味における神の守りは来ない。

聖意に則る世界は必ず守られていきます。どんなに敗北に見えましようとも、どんなに



失敗に見えましようとも、必ずそれは守られていく、勝つていくんです。だから、

「神はどんなに素晴らしいことをなさる方か」

といって、聖意を、神の意志を念願しないで、

「神はどれだけやってくださるか」

なんて勝手な気持でもって、御利益的に、御利益を自分の宗教的満足や、この世的に、あるいはその満足というものを目安にしてやったらば、それは聖意から外れますから、或る時は御利益がきくこともあるかもしれないけれども、ダメですよ。それは本当に守られていることではない。また、必ずそれは亡びに至る。

サタンに対してキリストが荒野の試みでどのようにして語られたか。パンの問題でも、

「人はパンばかりで生きるんじゃない。神の言^{ことば}によって生きるんだ」

といって、神の言を食うことなんです。「神の言によって」ということは、神の言に従い、神の言を食うことによつて、生きるんです。私たちは聖書の言が楽しくなるまでは、聖書は読めていない。聖書の言が何か「教え」であるうちはダメです。聖書の言が楽しくなつていかなくは。

本当に従う世界というのは、楽しい世界です。おかしいもので、必ずそこに力が来るから、生命が来るからです。生命が、力が、やって来るから嬉しい。喜びなんです。喜びというのは、この世的な喜びと違う。神の世界から来る喜びというのは、この聖書の世界から来る。必ずそういった神の意志と垂直の関係に立っているところの世界、それを義という。神の世界が垂直に立っているところの世界、これが「義」です。義においてこそ本当の喜びが来るんです。

義というものが何か堅苦しいものだと思つて、随分長い間、私はこの「義」という言葉が余り好きでなかった。ところが、この「義」というのは神様の意志を立てて、こちらが放り出された世界が義であるということ。そうしたら、「義」が「喜び」になった。そして、そこには神様の意志が通る世界ですから――ただ「正義」じゃないですよ――神様の驚くべき無限の意志ですから、内容が無限無量ですよ。無限無量なものが入つて来る。そして、それは神の驚くべき愛の生命ですから、義と愛とが全く相即してしまう。義と愛とは何も対立しない。

しかし長い間、この義と愛とが対立しているように教えられてきたものだから、無教会では何かこれが対立してしまっている。ちゃんと重なっているんです、義と愛とは。真理は、「三位一体の神」というけれども、ちゃんと重なっていますよ、「神・キリスト・聖霊」というものは。この三位一体はそれぞれ独自なもの、神は神、キリストはキリスト、聖霊は聖霊です。しかしながら、神・キリスト・聖霊はピタッと一つになって、重なっている。はっきり分かれていながら、また本当に一つになっているという、これは即ち本当の神秘的な、神秘的結合関係です。そういう、義にして愛という角度において初めて守りがある。この



角度において聖意に従うところに守りがある。ですから、その時には必ず、

11 是は至上者なんじのためにその使者輩^{つかいたち}におおせて 汝があゆむもろもろの道
になんじを守らせ給えばなり 12 彼ら手にてなんじの足の石にふれざらんため
に汝をささえん 13 なんじは獅^{しし}と蝮^{まむし}とをふみ壯獅^{わかきしし}と蛇^{へび}とを足の下にふみにじら
ん

「獅^{しし}と蝮^{まむし}とをふみ壯獅^{わかきしし}と蛇^{へび}」、これはみなサタンのものをこういうように表現している。

●身にしみて知る

14 彼その愛をわれにそそげるがゆえに我これを助けん かれわが名をしるがゆ
えに我これを高^{たかき}処^{ところ}におかん

この14節は大事な言です。これは神様の言葉です。だから、さつき言ったドラマになっ
ている。

15 かれ我をよばば我こたえん 我その苦難のときに偕^{とも}におりて之をたすけ之を

あがめん

「あがめん」というのはおかしい。神様が人間をあがめる、ということはない。むしろ「こ
れに栄光を与えん」とか、「栄光を現わさん」とか、訳したいところです。

16 われ長^{ながき}寿^{いのち}をもてかれを足^{たち}わしめ且わが救いをしめさん

これは生命の世界で、今度は神様の声が聞こえてきた。

「彼その愛をわれにそそげるがゆえに我これを助けん」

「神に心を傾ける」、さつき「信賴」といったでしょ。「汝によりたのむ」「信賴」がまさにこ
れ「信愛」になっている。よりたのみ、心を傾けるわけです。彼を愛するということとは、
神の恵みと愛と――愛とちよつと言が違うんですが――「彼その愛を我にそそげる」、日本
語の訳はなかなか味がありますが、「愛を我にそそげる」は、「愛をもってそれにからみつく」
というような、

「彼その愛を我に注げるがゆえに我これを助けん」

即ち神に信愛する。

「彼わが名を知るが故に我これを高きところにおかん」

詩篇は詩ですから、いつも対句でものを言う。「神を愛する」ということと、「知る」と
いうことが、これも一つなんです。さつき言った「信賴する」「信ずる」ということと、「愛
する」ということと、「わが名を知るがゆえに」ということと、みんなこれがシノニム〔同
意語〕のように、別な言葉でもって同じ事態を表現している。「信じ愛し知る」というんです。
頭で知るのはない。何を知るんですか。神様の實力を知っているんです。神様の實力を、
私たちはキリストの實力を、身をもって知るまでは、「信ずる」なんて言ったって、それは
ダメなんですよ。



皆さん、この信仰の世界で、キリストの実力を身に知るまでは、身にこたえて知るまでは、これを「信ずる」なんて言ったって、それは信仰ではない。

「何だか知らんが、私は生命が出てきた」

「何だか知らんが、私は今までこんなに疲れるのに、疲れなくなってきた」

「病はちつとも展開しなかったのに、この原始福音の世界にとびこんできたらば、病が軽くなってきた。いや、まだ欠陥はあるけれども、一向それに差支えなしにかくも活動できる」

なんてなわけです。皆さん、いろんな体験をお持ちでしょう。これは神を知っているんです。キリストを知っている。知るとはそのように身をもって、このキリストの栄光が現われている事態を自覚することなんです。これが信仰というんですよ、そういった実証的な「知」でないものは、知ではない。いくら聖書知識を貯め込んでみたって、ギリシヤ語、ヘブライ語をいくらやったって、それは聖書のまわりをグルグル回っているようなもので、それでは中に入れない。

絶対無条件です。何も資格はいらん。皆さん、日本語の漢字が読めなくなつていいですよ。ええ、「知る」とはそういうことです。一番深い「知」というのは、身をもって知る。太陽の光はどんなものですか。私たちは知っているではないですか。こんな暖かい光に照らされて、知っているじゃないですか。物理学的に「知る」というのも「知る」でしょうが、しかし身をもって、とにかく身に沁みて知っているわけです。身にしみて知っているということは同時に、愛せざるを得ない事態であるし、同時にまた信頼せざるを得ない世界です。信頼し、神様を愛し、己なんかそちのけで神様を愛していくとなつていけば、これは知るという事態にくるんです。相関関係です。

そうすると、神の愛が上から来るところの物凄い、何とかボルトの水力より強いから、こいつはグーッと回転を始める。開けっ放しの魂になる。魂が開け放しになるまでは、即ち自分の胸の扉がぶち破られて、キリストの生命が奔流してきて、キリストの血が輸血されて、キリストの血が流れるわけです。

「わが血を飲め、わが肉を食え」

とキリストが言われたのはそれです。そうなつて来なくては。またそうなつて来たならば、お互いさま突き抜けの魂になる。どうしても、いわゆる信仰という人たちと、いっぺん突き破られた人とは違う。いわゆる信仰という人は、どこかに凝りがあるんです、魂のコリが。理解的な信仰も悪くはないけれども、あせることないけれども、どうかいっぺん突き抜けてくださいよ。

この間の青梅のクリスマス集会でも、「何人かの人」がぶつ倒れてしまったじゃないですか。突き抜けが始まった。祈りの世界で何故ぶつ倒れて、そして時には電流にかかったようにしびれてどうにもならないか。何故そうなるか、それは神のみ霊が、キリストのみ霊が本



当にその人に臨んで来たからです。

パウロは最もそれのはつきりしたサンプルです。完全にパウロは三日間、動けなくなっていました。そんな素晴らしい展開をした。なかなか強情な男だったと見えますよ、パウロなんていうのは。キリストに物凄くやられて、そのかわりペッシャンコになったから、今までの生来のパウロは変質変貌、方向転換して、己が神のものとなり、今度はキリストのために、それこそ――スプートニク〔世界初の人工衛星〕ではないが――物凄い回転を始めた。

「かれ知るがゆえに我これを高きところに置かん」

と。本当に私たちが知る時、もう現実でありながら、真に高きところにおかれる。一切の災いは来てもとどかない。どういうことになっても、それでヘコタレない。ダルマさんは「七転び八起き」というけれども、いくら突っつかれて転ばされても、どっこい底には重みがある。キリストという重みがあるから、これは起^たち上がる。

「その悩みの時ともに我これを救^{たす}けこれに栄光を与えん」

私は、ここのは大好きだな。

「その悩みの時とともに置いて、艱難の時に神様が偕に居てくださってこれを助ける。これに栄えを与えん、これに神の栄光を与えるぞ」

という。

●聖霊の幕屋・キリストの幕屋・神の幕屋

どうか皆さん、幕屋というのは、幕屋の個体はどこに飛んで行っても幕屋の一員ですよ、具体的に。キリストの有機体なんだから、世界のはてに行っても一員です、大きな「キリストの幕屋」というものは。「聖霊の幕屋」はたくさんある。これはまた大きなキリストの幕屋です。一つ一つはそれぞれ教会、何派、プロテスタント、カトリック、何でもいい。それはみな幕屋です――こっちの言葉でいえばね――それはみな幕屋、それはみな教会。これを教会と言ったってかまわない。しかし、幕屋という言葉が一番この本質を表わすから、使っただけの話でね、何も名にこだわっているわけじゃない。

そういう教会とか幕屋とかいうものが、本当のキリストの生命体であるならば、聖霊の教会、聖霊の無教会、聖霊のカトリックであるならば、その全体が大きな「キリストの幕屋」であり、キリストのエクレシヤである。パウロが言っている通りです。そして、それはやがて最後の歴史の終りにおいて、新天新地が来る時に、「神の幕屋」となる。これは黙示録に書いてある。だが、私は地上では「神の幕屋」という言葉を――手島さんは使っているけれども――私は使いたくない。「神の幕屋」というのは最後の終末的事態における世界であって、そうそうみだりに使う言葉でないと私は思うから使わない。

聖霊の幕屋であって、そして大きな意味でキリストの幕屋は、やがて来る神の幕屋として、



本当にとり入れられる世界です。即ち、「神」「キリスト」「聖霊」といつて、幕屋にもその実存的な層において、この三つの層がある。そういう意味において私たちはどこまでもみ霊が私たちの中に交流し、臨み、生きていなければ、これはいくら幕屋なんていう言葉を使つたつて、そんなことはつまらんことです。

「我ながき生命をもて彼を足らわしめ、かつわが救いを示さん」

この「ながき生命」は70年、80年を、まあ旧約の人は思つたかもしれませんが、私たちにとつては「ながき生命」とは「永遠の生命」です。直訳すれば、「日々の長さ」。「ながき永遠の生命」は原語の味からいうと、一日一日とそれが長く続いていく、即ち非連続の連続とでもいいたいところです。非連続の連続です。一日を一生とし、今日を一生とし、今日の一日を一生として、展開して行く。即ち、幕屋の生命はみ霊ですから、私たちは。この幕屋の人が次から次へと人間は変わつていつても、その幕屋それ自身は次から次へと、ちょうどまことのイスラエルが続いていくように、続いて行くわけです。また各個人が、

「永遠の生命もてこれを足らわしめ、かつ我が救いを示さん」

と。即ち、永遠の生命を与えんがためにキリストが来られた。

「永遠の生命を与える」

とは何か。即ち、

「天国を与える、天国を現する」

ということです。それは即ち、神の栄光としての永遠の生命であり、神の栄光としての天国でありますから、それが即ち救いというんです。救いとは、

「神の栄光に入れられ、神の栄光を表わす」

ことを救いという。これも「救い」という言葉を御利益的に解釈したら困る。我々は救われんがために信仰なんかしているんじゃない。「神の栄光の現われ」ということが本当の私たちのいわば「救い」なんだから、「救い」と言うだけの話です。どうか皆さん、何と言いますかね、信仰の質を純粹に、そしてこの質を本当に高次なものにして頂かないと、本当の力はないですよ。御利益的な角度では本当の力はこない。神の、キリストの救いとは、

「キリストの如きものと化せられる」

ことが、即ち救いなんです。

「栄光より栄光に至りて遂にキリストの像に化^{すがた}するなり」

とパウロが言った。これが救いなんです。

●キリストの勝利の幕屋

そういうわけで、もう全くキリスト中心であり、神中心であり、神一切、キリスト一切ということになりましたから、詩篇91篇の「勝利の幕屋」というのは「キリストの勝利の幕屋」であつて、私たちが何も勝つのではない。キリストが勝利し給うところの幕屋です



から、私たちはキリストのみ霊を頂いていくならば、このキリストの勝利していく幕屋です。
「キリストが勝利する」

とは何か。敵を救いあげていくところの角度をもっているということです。どんなものも本当に救い上げて、喜びの世界に、キリストの生命の世界に入れていく実力を衣せられていくということが「勝利」という意味です。

これは本当にキリストが遂にどん底に立ち、

「十字架の死に至るまで従い給えり」

という、この聖意現成をした時に、キリストは十字架の極みを突破して、復活、昇天された。全世界はこのキリストの本当のどん底の歩みを、その驚くべき勝利によって救われて行く。キリストの神の世界にもたげられて行くわけです。

いかなるものが、こんな盛んな事態、歴史的な事態、この実存的な事態を、何か他に示してくれるか。仏教の悟りの世界も素晴らしいけれども、それは悟りの世界です。生命が展開してやまない、また私たちが死んでも死なないところの神の驚くべき栄光の現われとして、本当の意味で文化を推進させるところの原動力として、福音というものがあるということです。

しかしながら、今のキリスト教は、それからずいぶんズレをきたしてしまった。ヨーロッパのキリスト教国自身がダメです。だから、戦争という悲惨なことが行われている。どうしても全世界を荷っていくものは、キリストの十字架です。実はさっきの三角錐体をもうひとつグーッと上へ延長していきますと「三角錐体の頂点を接点にして上へ逆転する」、この三角錐体「下の三角錐体」それ自身がこの世を表わしている。そしてキリストの十字架が立っている〔註… GXの垂線に、上下の三角錐体の接点に十字架が立つ。下の三角錐体がこの世、上が天国を示す〕。この上にもう一つ別の三角錐体がつくり返って、この全体を天的なものに変えようとするのが、このキリストの悲願、霊願、本願であります。

すべての人の救われんがために。それからもれる人がどのようにあるか誰も知らん。「キリスト」の「キ」の字も知らない人が天国に行きます。聖書の知識に明るい人が地獄に行くかもしれない。わからんです、誰がどうなるか。問題は、まことのものを求めて、本当にまことの生き方をしようとしているか。そして、これにぶつかつたならば、その本ものを自分の中に生かして頂き、キリストの十字架において投げ捨てられたものとして本当に受けとれるか。キリストの十字架において自分が投げ捨てられているということを受けとるまでは、この展開は始まらない。しかも、投げ捨てられている己というものを受けとることは一回ではすまない。何回も何回も、一回毎にそれは質的に深められて行かなければなりません。

「死に至るまで悔改の連続である」

とはそのことです。悔改とは、悔改めとは前進すること、転向また転向して行くことです。



私たちは集会をしながら決して繰返しをしているのではない。一回が、この今日の一回というところを、この次の集会の時には、その先を行かなければいけない。同じところを歩いていたら、いわんや、あと戻りなどしたら、ダメですよ。戻らないんです、私たちは。私たちは聖書をただ学んでいるのではないのだから。

「聖書の現実には、ドラマの中にどんどん進んで行こう」と、こうやっているのだから。

それで、この幕屋というものが、教会の本当の姿である。み霊のことはどうしても、おろそかにされている従来、私の経験した無教会からは、何をおっしゃられても仕方がない。私は行きます。キリストという驚くべきこの磁極に引きつけられて進んで行く。仕方がない。どうか皆さんも、もうここへ来たら、こういったような幕屋の事態に、実存共同体というものが全世界に広がって行く時に、真の平和があるということ。単に教会とか何とか言っているんじゃない。全世界にこの幕屋的な在り方というものが——社会というものが、もし小学校で「社会」というならば——

「社会はかくの如き構造のものなり！」

と言わざるを得ないところに来なければならぬ。そのためには、「個」というものが真に深い神との関係において、キリストによって入って行く。これは詩篇が祈りの世界で、あらゆる人間の実存面が表われてます、詩篇の中に。そして、それが最後にはみな讃美に、神の栄光に帰する。その讃美に詩篇というものが展開している。

「ああ、我が神、我が神、何ぞわれを捨て給うか」

と言って、叫びだした22篇が、最後は本当に聖名を讃えているではないですか。私たちはこのキリストに、キリストの光の中に——神の光というのはこのキリストという隠れ場です——キリストという光の中に入ってごらん。

「汝らは世の光なり」

「然りアーメン」

ということですよ。では、終わります。

● 祈り

聖なる真の父なる神様。一切を左顧右眄することなく、聖書の現実の中に、一切の先入観を抜きさって、私たちはあい共に今、立ち至り、そのみ光の中に、み言の中に入れられ、み力のうちにつかまえられ、感謝いたします。私自身はまことに何者でもございませぬ。また、まことに穢^{けが}れたる者であります。しかし、神様、このようなものをゆるし、主イエス・キリストの器として、私たちをかくお用いくださるとなしていらつしやるご恩寵に感激、感謝いたします。

私たちが、救いが即ちキリストのご栄光の現われんことに思いを致し、一切が主イエス・



キリストに、この驚くべき太陽に集中され、それから一切が発しているこの事態に、即ち

「聖書は我につきて証するなり」

と言われた驚くべき中心点に、そして親しく福音書に自らを現わし給うたナザレのイエスに現わし給うたこの貴神あなたのご栄光に、驚くばかりであります。私たちはこれに驚嘆驚倒しなければ、読むことはできません。いよいよ、理解ではなくて、その前にぶつ倒れ、それにつかまれ、それによつて立たせられ、そして本当にキリストによつてこの幕屋というのが真に形成され、これはどんなに破れであつても、いかなる嵐も吹き消すことのできない、また倒すことのできない聖霊の灯火であり、また大黒柱が立っているが故に、感謝であります。

お父様、この大黒柱「十字架」、聖霊の灯ひ、これによつて幕屋は進んで行きます。その他の何ものによつても進むことはできません。この驚くべき恩寵の事態、今、瞑想しても、まことに私たちの魂は歓喜に溢れます。

お父様、この兄弟姉妹たちが、このキリストの大黒柱と灯にあつて、互いに幕の線を張つて進んで行きます。この人生の旅は、世界の歴史に参与しているところの、貴神の歴史の旅に参与せしめられているこの光榮ある事態は、どんな人の目には小さく見えましようとも、どんなに迫害されましようとも、一向差支さしつかへございません。

お父様、どうか、この私たちを使つて、キリストの愛を、その光を、その智慧を、その一切を、無限に多様にお現わしくくださらんことを切にお願いいたします。一人ひとりかけがえのないものとして、かく存在せしめられ、全世界のクリスチャンは本当にキリストにあつて、その意味において一つであります。

お父様、この大きな一つを真にみ霊にあつて自覚し、世界の涯までも、真に握手を、魂の握手をクリスチャンはできるはずであります。そのようにして、クリスチャンを大いに祝福し、また使い、新しくいかなる人をも、わけ隔ても何もなく、この喜びの世界に入れしむべく、一人ひとりを真の伝道者として、実存的に遣わし給はんことを願ひ奉ります。

次の日曜は、那珂湊の教会に私は参りますが、彼処の教会はドイツ人がやつています。どうか、その教会の牧師さんと兄弟姉妹たちとを祝福し、本当にキリストの喜びを共にし、福音の喜びを共にして、互いに讃美できますように御導きくださらんことを切に願ひ奉ります。至るところ即ち、貴神の天国であります。

お父様、また今日新しい兄弟姉妹たちを本当に感謝であります。私の至らない、この言葉なんかどうでもよくあります。どうか、貴神の御真理が、貴神の御声がこの聖書においてますます現じ、また兄弟姉妹たちの愛において現じ、そして、この喜びの中に共に進んで行くことができますように願ひ奉ります。この年の始めに当たつて、かくの如き集会をもつことができて、感謝であります。……〔以下録音切れ〕……

